

## 第6章 状態述語文の他動化と使役化Ⅲ 一形容詞派生動詞における自他と使役一

### 6.1 はじめに

第3章、第4章、第5章では、状態述語文の他動化と使役化を状態述語文の他動化形式・使役化形式の「～くする」「～くさせる」構文や「～ようにする」「～ようにさせる」構文を通じて考察してきた。本章では、これらの構文的な方法とは別に語彙的に存在する自動詞と他動詞を用いた状態述語文の他動化と使役化について考察を行う。

現代日本語には、数に限りはあるが形容詞から派生した動詞が存在する。本章では、それらの動詞「形容詞+まる」（自動詞）と「形容詞+める」（他動詞）を取り上げ、状態述語文の他動化と使役化を語彙的な側面から考察する。

- (1) a. 部屋が暖かい。  
b. 太郎が部屋を暖かくする。  
c. 太郎が部屋を暖める。

例えば、(1a)は「部屋」が「暖かい」という状態にあることを表す状態述語文であるが、(1a)の状態を「太郎」という別の関与者が引き起こすことを表すためには、すでに第3章で考察したように、(1b)の「～くする」構文を用いることができる。ところが、(1b)の他に、もう一つの方法がある。それは、(1c)のように形容詞から派生した他動詞「形容詞+める」を用いる方法である。(1c)の「暖める」は、形容詞「暖かい」の語幹に他動化接辞「める」が接続してできた他動詞である。(1c)のような方法は、形容詞派生動詞の数に限りがあるため、生産的な方法とはいえないが、「～くする」構文と共に状態を他動化・使役化する一つの方法といえる。

では、「形容詞+める」と「形容詞+くする」は、同じ状況を表すのか。(1)では「暖かくする」と「暖める」がほぼ同様の事態を表しているが、次の(2)や(3)から、「形容詞+める」と「形容詞+くする」は常に同じ状況を表すのに用いられるわけではないことが分かる。<sup>\*1</sup>

- (2) a. 塀が高い。
- b. 塀を高くする。
- c. ??塀を高める。
- (3) a. 価値が高い。
- b. ?価値を高くする。
- c. 価値を高める。

(2)では、(2a)の状態を引き起こすことを表すのに(2b)の「高くする」は用いられるが、(2c)の「高める」は用いられない。一方、(3)では、(3a)の状態を引き起こすことを表すのに(3c)の「高める」は用いられるのに対して(3b)の「高くする」は用いられない。(2)や(3)の例から、「形容詞+める」と「形容詞+くする」構文は、それぞれ異なる意味を持ち、異なる状況を表すのではないかということが考えられる。

以下、6.2 節では形容詞派生の動詞「形容詞+まる」と「形容詞+める」の自他と使役の関係を検討する。そして、その自他と使役の関係が「形容詞+くする」構文の自他と使役の関係と対応することを指摘し、「形容詞+くする」構文における自他と使役の関係の妥当性を検証する。さらに、6.3 節では「形容詞+める」と「形容詞+くする」を比較考察し、両者の意味的違いを明らかにする。そして、6.4 節では「形容詞+める」と「形容詞+くする」がそれぞれ目的語として取る名詞句を調べ、その名詞句の分布を「形容詞+める」と「形容詞+くする」の意味的特徴に基づいて説明する。

---

\*1 用例の容認度に関する判定は筆者の調査によるものであるが、話者によっては本論文で示している判定と異なる見方をするかも知れない。

## 6.2 形容詞派生動詞における自他と使役

現代日本語には、次の(4)に示すような形容詞から派生した自動詞と他動詞が存在する。\*

形容詞	自動詞	他動詞
(4) 暖かい	暖まる	暖める
薄い	薄まる	薄める
清い	清まる	清める
黒い	黒まる	黒める
静かだ	静まる	静める
固い	固まる	固める
狭い	狭まる	狭める
高い	高まる	高める
強い	強まる	強める
ぬるい	ぬるむ	ぬるめる
低い	低まる	低める
早い	早まる	早める
広い	広まる	広める
深い	深まる	深める
細い	細まる	細める
丸い	丸まる	丸める
緩い	緩まる	緩める
弱い	弱まる	弱める

(4)にあげたように、一つの形容詞に対して、自動詞「形容詞+まる」と他動詞「形容詞+める」が対応している。例えば、「暖かい」という形容詞に対して、「暖まる」と「暖める」という自他の動詞が存在する。そして、(4)のような自他の動詞には、次の(5)に示

---

\*2 形容詞から派生した自動詞・他動詞には(4)にあげた18個の他に「赤らむ」「赤める」や「定まる」「定める」などもある。

すような他動化と使役化の過程が想定される。

- (5) a. 部屋が暖かい。  
b. 部屋が暖まる。 → b'.??太郎が部屋を暖ませる。  
c. 太郎が部屋を暖める。 → c'. 花子が太郎に部屋を暖めさせる。

(5)では、(5a)の「部屋が暖かい」という状態述語文を出発点としてみると、ここから(5b)の自動詞文「部屋が暖まる」が派生する。ここで、(5b)の「暖まる」を他動化すると、(5c)の「暖める」になり、(5b)と(5c)は自他関係を形成する。そして、(5b)の「暖まる」を使役化すると(5b')の「暖ませる」になり、(5b)と(5b')は使役関係を形成する。さらに、(5c)の「暖める」を使役化すると、(5c')の「暖めさせる」になる。(5)のような自他と使役の関係において、(5c)の他動詞文と(5b')の使役文は同じ項構造を持ち、ほぼ同様の事態を叙述する。<sup>\*)</sup>したがって、(5a)の状態述語文が表す状態を別の関与者「太郎」が引き起こすことを表すには、(5c)の他動詞文あるいは実際には成立しないが、形式的には(5b')の使役文を用いることが可能である。(5b')が成立しないのは、「部屋」が意志性を持たない無生物であるため、他動化と使役化の選択原理に基づき、他動詞文(5c)が選択されるからである。

このような(5)の自他と使役の関係において注目したいのは、(5a)の状態述語文「部屋が暖かい」と、(5c)の他動詞文「太郎が部屋を暖める」、(5b')の使役文「太郎が部屋を暖ませる」との間には、(5b)の自動詞文「部屋が暖まる」が介在するという事実である。つまり、「暖かい」という状態を他動化・使役化するためには、状態を直接他動化・使役化することはできず、自動詞化の「暖まる(変化を表す)」という中間段階が存在し、その中間段階を経て他動化への「暖める」や使役化への「暖ませる」が実現するということである。そして、(5)のような自他と使役の関係は、第3章、第4章で考察した「～くす

---

\*3 他動詞文と自動詞文の使役文が同じ項構造を持ち、ほぼ同様の事態を叙述するということは自他対応を持つ動詞に一般に見られる現象である。例えば、「集まる」と「集める」の自他対応の場合、他動詞文「学生を集める」と自動詞文の使役文「学生を集ませる」は同じ項構造を持ちほぼ同様の事態を表す。

る」「～くさせる」構文や、第5章で考察した「～ようにする」「～ようにさせる」構文において想定した自他と使役の関係と平行的である。そして、その平行性は構文的な自他と使役の関係を語彙的なレベルで検証することになると考えられる。つまり、次の(7)と(8)にあげた構文的な自他と使役の関係が、次の(6)のような語彙的な自他と使役の関係においても想定されることから、構文的な自他と使役の関係が裏付けられるということである。

- (6) a. 部屋が暖かい。 (5)の再掲  
 b. 部屋が暖まる。 → b'. ??太郎が部屋を暖ませる。  
 c. 太郎が部屋を暖める。 → c'. 花子が太郎に部屋を暖めさせる。
- (7) a. 部屋が暖かい。  
 b. 部屋が暖かくなる。 → b'. ??太郎が部屋を暖かくさせる。  
 c. 太郎が部屋を暖かくする。 → c'. 花子は太郎に部屋を暖かくさせる。
- (8) a. 太郎が煙草を吸わない。  
 b. 太郎が煙草を吸わないようになる。  
 → b'. 医者は太郎に煙草を吸わないようにさせる。  
 c. 医者は太郎が煙草を吸わないようにする。  
 → c'. 母親は医者太郎に煙草を吸わないようにさせる。

例えば、(6)と(7)の対応関係を見てみる。(6a)、(7a)は「部屋」が暖かい状態にあるということを表す状態述語文であるが、このような部屋の状態を「太郎」が引き起こすという状況を表すためには、(6a)の「暖かい」は、まず(6b)の状態変化を表す自動詞文「暖まる」になる。(7a)の「暖かい」も(7b)の状態変化を表す自動詞文「暖かくなる」になる。次に、(6b)の「暖まる」を他動化すると(6c)の「暖める」になり、(6b)の「暖まる」を使役化すると(6b')の「暖ませる」になる。(7b)の「暖かくなる」も他動化すると(7c)の「暖かくする」になり、(7b)の「暖かくなる」を使役化すると(7b')の「暖かくさせる」になる。すなわち、(6b)の「暖まる」と(6c)の「暖める」が自他関係にあり、(6b)の「暖まる」と(6b')の「暖ませる」が使役関係にあるように、(7b)の「暖かくなる」と(7c)の「暖かくする」は自他関係に、(7b)の「暖かくなる」と(7b')の「暖かくさせる」は使

役関係にある。このように、(7)の構文的な自他と使役の関係が(6)の語彙的な自他と使役の関係においても存在するという事実は、(7)の構文的な自他と使役の関係の妥当性を物語っている。次に、第5章で述べた(8)の「～ようにする」「～ようにさせる」構文における自他と使役の関係を改めて見てみる。(8a)の否定文「太郎が煙草を吸わない」が表す状態を「医者」が引き起こすことを表すためには、(8a)を出発点として、(8b)の状態変化を表す自動詞文「吸わないようになる」が派生する。そして、(8b)の「吸わないようになる」を他動化すると、(8c)の「吸わないようにする」になり、使役化すると(8b)の「吸わないようにさせる」になる。さらに、(8c)の他動詞文「吸わないようにする」を使役化すると、(8c)の「吸わないようにさせる」になる。(8)は基になる状態述語文が形容詞からなるものではないので、(6)と直接対応するわけではないが、自動詞文「～ようになる」と他動詞文「～ようにする」が自他関係に、自動詞文「～ようになる」と使役文「～ようにさせる」が使役関係にあること、すなわち「なる」と「する」が自他関係にあり、「なる」と「させる」が使役関係にあることは、(7)における自他と使役の関係と平行していることから、間接的に(6)とも対応していることになる。

以上から分かるように、状態述語文の他動化と使役化は、状態述語文を出発点として、自動詞文が派生した後、そこから他動化や使役化が行われる。つまり、状態を他動化・使役化する過程には、状態が直接他動化や使役化と結びつくわけではなく、変化という過程(暖まる、暖かくなる、吸わないようになる)が介在すると考えられるのである。次の<表1>は、語彙的な自他と使役の関係を構文的な自他と使役の関係に対応させたものである。

暖かい		暖かい
↓		↓
暖まる(自)	—	暖かくなる(自)
	—	暖かくさせる(使役)
↓		↓
暖める(他)	—	暖かくする(他)
	—	暖かくさせる(使役)

<表1>

### 6.3 「形容詞+める」と「形容詞+くする」の意味的違い

前節の 6.2 で述べたように、「形容詞+める」と「形容詞+くする」は、同じく状態述語文の他動化形式である。両形式は同じ形容詞を基にしているため、類似した意味を表すと予想される。例えば、「暖める」と「暖かくする」は両者共に対象を暖かい状態に変化させることを意味する。しかし、「はじめに」でも述べたように、両者は同じ状況を描くこともできるが、常に同じ状況を表すのに用いられるわけではない。例えば、次の(9)では、両者を同じ状況で用いることができるが、(10)、(11)ではどちらか一方しか用いることができない。

- (9) a. 部屋を暖める。  
b. 部屋を暖かくする。 (1)の再掲

- (10) a. ??塀を高める。  
b. 塀を高くする。 (2)の再掲

- (11) a. 教養を高める。  
b. ??教養を高くする。

(10)、(11)のような例は、「形容詞+める」と「形容詞+くする」が互いに異なる意味的特徴を持っていることを示している。以下、本節では、両者の意味的違いを分析する。

#### 6.3.1 アスペクト性

本節では、「形容詞+める」と「形容詞+くする」のアスペクト性を調べ、両者に違いが見られるかを考察する。まず、「形容詞+める」について見てみる。

「形容詞+める」は工藤(1995)の動詞分類に基づけば、主体動作・客体変化動詞に、Vendler(1967)の動詞分類に基づけば、達成動詞(accomplishments)に属すると考えられる。主体動作・客体変化動詞や達成動詞は、主語が目的語に何らかの働きかけを行い、目的語の状態変化ないし位置変化を引き起こすことを表す動詞であり、典型的には対応する自動詞(主体変化動詞)を持つものが多い。例えば、次の(12)にあげたような動詞がそれである。

- (12) 壊す/壊れる 破る/破れる 切る/切れる 倒す/倒れる

曲げる/曲がる 染める/染まる

「形容詞+める」も、次の(13)、(14)のように主語が目的語に働きかけて、目的語の状態変化を引き起こすことを表しており、対応する自動詞「形容詞+まる」を持っていることから、主体動作・客体変化動詞や、達成動詞に分類されると考えられる。

- (13) a. スープを温める。  
b. スープが温まる。
- (14) a. 防犯意識を高める。  
b. 防犯意識が高まる。

また、主体動作・客体変化動詞は「ている」形が「進行」を表し、主体変化動詞である自動詞は「ている」形が「結果」を表すとされるが(工藤 1995)、「形容詞+める」「形容詞+まる」を「ている」形にすると、次の(15)から分かるように「温めている」は進行を、「温まっている」は結果を表している。このことから、「温める」は主体動作・客体変化動詞で、「温まる」は主体変化動詞に属することが分かる。

- (15) a. 私はスープを温めている。 「進行」  
b. スープが温まっている。 「結果」

次に、「形容詞+くする」形を一つの動詞と捉えて、そのアスペクト性について調べてみる。「形容詞+くする」形も、工藤(1995)の動詞分類に基づけば、主体動作・客体変化動詞に、Vendler(1967)の動詞分類に基づけば、達成動詞(accomplishments)に属すると考えられる。なぜなら、次の(16)のように「形容詞+くする」は主語の何らかの働きかけによって目的語が状態変化を被るという意味を表し、対応する自動詞文「~くなる」(主体変化動詞)を持つからである。

- (16) a. スープを温かくする。  
b. スープが暖かくなる。



なお、(16a)、(16b)を「ている」形にしてみると、次の(17)のようにそれぞれ「進行」と「結果」の意味を表すことから、「形容詞＋くする」は主体動作・客体変化動詞で、「形容詞＋くなる」は主体変化動詞であることが分かる。

- (17) a. スープを温かくしている。 「進行」  
b. スープが温かくなっている。 「結果」

次は、述語が表す出来事が「完結(telic)点」を内包しているかいないかという完結点の有無(telicity)について調べてみる。完結点の有無を調べるためには、一般に継続時間を表す副詞句や終了時間を表す副詞句を挿入して動詞との共起関係をみるテストが行われる。例えば、「5分間」のような継続時間を表す副詞は「活動動詞(継続動詞)」としか共起せず、「5分で」のような終了期限を表す副詞は到達点を持つ「到達動詞(位置変化・状態変化動詞)」または「達成動詞(状態変化使役動詞)」と共起できると指摘されている。このようなテストを「形容詞＋める」や「形容詞＋くする」に行ってみる。

- (18) a. 5分でスープを温めた。  
b. 5分間スープを温めた。

(18)の「形容詞＋める」は終了期限「5分で」と継続時間「5分間」の両方の副詞と共起することから、完結的(telic)性質と未完結的(atelic)性質を両方持っていることが分かる。このようなアスペクト的特性は次節で述べる「形容詞＋める」の意味的特徴と関連する。

次に「形容詞＋くする」構文の完結点の有無(telicity)を調べてみる。

- (19) a. 5分でスープを温かくした。  
b. 5分間スープを温かくした。

「形容詞＋くする」は(19a)のように「5分で」という終了期限を表す副詞句とは共起するが、(19b)のように「5分間」という継続時間を表す副詞句とは共起しない。このことから、「形容詞＋くする」は完結的(telic)性質のみを持つということが分かる。

以上、「形容詞+める」と「形容詞+くする」のアスペクト特性について考察した。まとめると、次のようである。

- (20) 「形容詞+める」: 達成動詞  
完結的(telic)性質と未完結的(atelic)性質を持つ。
- 「形容詞+くする」: 達成動詞  
完結的(telic)性質を持つ。

### 6.3.2 過程と結果

本節では、「形容詞+める」と「形容詞+くする」の意味的違いについて、6.3.1 節で述べたアスペクト的違いとも関連付けながら考察を進めていく。

- (21) a. スープを温める。  
b. スープを温かくする。

(21)では「温める」と「温かくする」が、共に「スープ」を「温かい」という状態に変化させることを表しているが、両者は全く同じ意味を表すわけではない。それでは、両者の意味的違いは具体的にどのようなものだろうか。

まず、「形容詞+める」に関して検討してみることにする。杉岡(2002)では、「形容詞+める」「形容詞+まる」の「める」「まる」に含まれる「m」の音は、程度をあらわす「me(め)」という名詞化接辞と関係していると指摘し、次のように述べている。

「め」は形容詞が持つ段階性スケールの特定の点に言及する名詞表現を作るが（「テンポが早めだ、固めにゆでる」）、「める、まる」がついた動詞はそのスケール内の程度の変化をあらわす動詞表現(早める、固める)を作ると考えられ、共に「ある状態の程度」に言及している。したがって、段階性や程度の変化が「める、まる」という接辞の基本的な意味ということができ、英語で見られたと同じように、その変化は一時的な属性(stage-level property)の変化に限られるの

で、「室温が高まる」に対して「\*背が高まる、\*フェンスを高める」とは言えない。<sup>4</sup>

杉岡(2002)p.104

杉岡(2002)の指摘のように、「形容詞+める」は段階性や程度の変化を表すと考えられるが、以下本論文では、杉岡(2002)の分析を踏まえて、「形容詞+める」の意味をさらに分析していく。

「形容詞+める」が表す段階性や程度の変化とは、具体的にはどのようなものなのだろうか。例えば「温める」というのは、「温かくない状態」から「温かい状態」に移行していく過程を表すが、この過程には多数の「温かい」という段階が存在する。つまり、「形容詞+める」はこの多数の段階を一つ一つ移行していく過程に焦点が置かれる表現であると考えられる。ただし、ここで注意しなければならないのは、それらの多数の段階には到達点である最終段階が存在しないという点である。つまり、「温める」によって達成される「温かい」という状態は、「温かい」が持ち得る最終的な状態(限度)ではないということである。もちろん、現実的には、「温める」によって達成される最終的な「温かい」状態というのは存在するはずであるが、言語的には含意していないと考えられる。

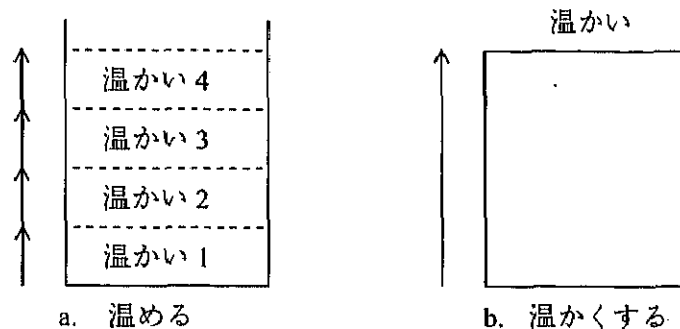
それに対して、「形容詞+くする」は、第3章でも述べたように、主語が「を」格名詞句に働きかけて「を」格名詞句の状態変化を引き起こすことを表す。その際、形容詞の連用形である「〜く」や形容動詞、断定の助動詞「だ」の連用形である「〜に」は他動化の結果を表す。そして、その結果状態は最終的な到達点である。さらに、「形容詞+める」が段階性を持つのにに対して、「形容詞+くする」は段階性を持たない。例えば、「温かく

---

\*4 杉岡(2002)では、一時的な属性(stage-level property)と形容詞派生動詞との関係に関する Levin & Rappaport Hovav(1995:96)の指摘を紹介している。彼らは、一時的な属性(stage-level property)をあらわす形容詞は動詞になれるが、時間と共に変化しない固体の属性(individual-level property)を示すものは動詞化されない、という一般化を指摘している。例えば smart という形容詞には、「格好良い」という一時的な属性と「頭がいい」という個体属性の意味があるが、派生動詞 smarten が普通は「格好良くする、なる」という意味で使われるのはそのためであるとしている。ただし、何を一時的属性と見なすかということは、話者の認識や経験によるところがあり、例えば体重の増加は比較的ひんぱんに起こるので fat という形容詞は一時的属性と感じられ to fatten という動詞が使われるが、身長の場合は個体の属性であると認識されるために tall から派生する動詞(\*to tall)は存在しないと述べている。

する」は「温かくない」状態から「温かい」状態に変化することを表すが、この兩段階の間には他の段階は存在しない。もちろん、現実的には、「温かい」状態に至るまでは様々な温度の変化をたどっていくわけだから、多数の段階が存在するはずであるが、「形容詞＋くする」は言語的にはこれらの諸段階には言及せず、最終的な段階すなわち「温かくなつた」という結果のみを問題にしていると考えられる。

「形容詞＋める」と「形容詞＋くする」の違いを図で表してみると次のようになる。



a の「温める」は、「温かい」という多数の段階が存在し、それらの段階を一つ一つ移行していく過程を表しているだけであり、そこには最終的な「温かい」段階は存在しない。「温かい4」の次は「温かい5」「温かい6…」へと続いていくわけである。したがって、「3分で温める」における「温める」が表す完結的(telic)性質は、例えば「温かい1」から「温かい2」への移行が完了したということを表すのであって、最終的な「温かい」段階に達したことを表しているわけではないと考えられる。このような「形容詞＋める」の意味的特徴は、「形容詞＋める」が持つアスペクト性と関連している。つまり、「形容詞＋める」が持つ未完結的(atelic)性質は変化の過程に焦点が置かれる側面につながり、完結的(telic)性質は一つ一つの段階への移行が完了したという意味を持たせている。一方、b の「温かくする」では変化の過程における諸段階は存在しないが、最終的な「温かい」段階は存在する。したがって、「3分で温かくした」における「温かくした」が表す完結的(telic)性質は、最終的な「温かい」段階、すなわち結果に達したことを表している。

このような対立は、次のように、到達点の挿入による容認度の違いに反映されている。

- (22) a. 風呂のお湯を40度に温めた。  
b. ?風呂のお湯を40度に温かくした。

- (23) a. ゼリーをかちかちに固めた。  
 b. ??ゼリーをかちかちに固くした。
- (24) a. 部屋を 10 畳から6畳に狭めた。  
 b. ?部屋を 10 畳から6畳に狭くした。
- (25) a. 挽肉をボール状に丸めた。  
 b. ??挽肉をボール状に丸くした。
- (26) a. 値段を2万円にあげた。  
 b. ??値段を2万円に高くした。
- (27) a. 日本のサッカーを世界一にした。  
 b. ??日本のサッカーを世界一に強くした。

(22a)～(27a)では、「40 度に」「かちかちに」「6 畳に」など変化の到達点を挿入しても文が自然に成立するが、(22b)～(27b)では、変化の到達点を挿入すると文の容認度がかなり落ちてしまう。(26a)、(27a)では「??値段を高める」や「??日本のサッカーを強める」が用いられないため、「あげる」と「～く(に)する」構文にしてある。このような到達点との共起関係の違いは「形容詞+める」と「形容詞+くする」の意味的違いから説明できる。「形容詞+める」は変化の過程を表しており、その変化の最終的な段階(到達点)は持たないため、「40 度に」や「6 畳に」という到達点との共起が可能になる。しかも、到達点を補充することによって文の完成度があがる効果も得られる。一方、(22b)～(27b)の「形容詞+くする」は内在的に最終的な段階(到達点)を含んでいるため、そこに到達点を付加すると二重到達点を設定することになるため、到達点の挿入を許さないのである。

また、次のように「まで」を使った文においても「形容詞+める」と「形容詞+くする」の意味的違いが観察される。

- (28) a. 朝まで部屋を暖める。  
 b. 朝まで部屋を暖かくする。

(28a)の「暖める」は朝まで部屋の状態変化が続けて行われるという解釈、すなわち主語が部屋の状態変化を実現させるべく、朝まで働きかけを続けるという解釈になるが、(28b)の「暖かくする」は一旦「暖かい」という最終段階に達した後、その結果状態が朝まで

続くようにするという解釈になるため、「暖かい」という最終段階に達するための行為は朝まで続かなくてもいいことになる。

以上から、「形容詞+める」と「形容詞+くする」の意味的違いは次のようにまとめることができる。

(29) 「形容詞+める」： 変化の過程に焦点が置かれる表現である。

最終的な段階は存在しない。

「形容詞+くする」： 変化の結果に焦点が置かれる表現である。

最終的な段階が存在する。

### 6.3.3 語彙概念構造

本節でいう語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure)とは、動詞が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表示した構造を指す(影山 1996)。つまり、種々の動詞語彙を幾つかの意味タイプに分類した際に、それぞれのタイプが持つ基本的な意味の骨組みのことである。影山(1996)では次の(30)にあげた4つの意味タイプを設定し、それぞれを Vendler (1967)の動詞分類に基づき、a は状態動詞(state)、b は到達動詞(achievements)、c は活動動詞(activities)、d は達成動詞(accomplishments)に対応させている。さらに、(30)の a,b,c の構造は基本的な意味タイプを構成し、状態変化使役 d は継続動詞 c と状態変化・位置変化 b を使役関係(つまりコントロールの作用)で結びつけたものであると述べている。

(30) a. 静止状態・静止位置

[STATE y BE [LOC AT z]]

b. 位置変化・状態変化

[EVENT BECOME [STATE y BE [LOC AT z]]]

c. 継続活動

[EVENT x ACT (ON y)]

d. 状態変化使役

$$\left. \begin{array}{l} X \\ \text{[EVENT X ACT(ON y)]} \end{array} \right\} \text{CONTROL[BECOME[y BE AT z]]}$$

本節では、影山(1996)に基づき、「形容詞+める」と「形容詞+くする」の語彙概念構造を示してみる。両者共に Vendler(1967)の動詞分類の「達成動詞(accomplishments)」に属すると考えられるため、達成動詞の語彙概念構造である(30d)が適用されるが、6.3.1節と6.3.2節で述べたように、両者には意味的違いが存在するので、語彙概念構造にもその違いは反映されなければならない(影山(1996)では(30d)の達成動詞の語彙概念構造において、使役の概念を「CONTROL」で表しているが、研究者によっては「CAUSE」で表す場合もある)。<sup>5</sup>

(31) 形容詞+める：

$$\left\{ \begin{array}{c} X \\ \text{[EVENT X ACT(ON y)]} \end{array} \right\} \text{CONTROL[BECOME[y BE AT Z(- end point)]]}$$

(32) 形容詞+くする：

$$\left\{ \begin{array}{c} X \\ \text{EVENT X ACT(ON y)} \end{array} \right\} \text{CONTROL[BECOME[y BE AT Z(+ end point)]]}$$

(31)と(32)はそれぞれ「形容詞+める」と「形容詞+くする」の語彙概念構造を表したものであるが、両者に違いが見られるのは変化の結果状態のところである。つまり、(31)の「形容詞+める」では、[- end point]が変化の結果状態に最終到達点が存在しないことを表しており、(32)の「形容詞+くする」では、[+ end point]が変化の結果状態に最終到達点が存在することを表している。

また、本論文では状態と他動化・使役化との間に中間段階として状態変化の自動詞文「Y

\*5 杉岡(2002)でも、「形容詞+める」は達成動詞に属すると述べ、「形容詞+める」「形容詞+まる」の自他交替の語彙概念構造を次のように設定している。結果状態についている[+ Degree]という素性は挿入される形容詞が段階性を持つことを示すものである。

a. 形容詞+める：

$$[x / \text{Event}] \text{CONTROL}[y \text{ BECOME}[y \text{ BE at-}([+ \text{Degree}] \text{State})]]$$

b. 形容詞+まる：

$$[y \text{ BECOME}[y \text{ BE at-}([+ \text{Degree}] \text{State})]]$$

がZくなる」を想定しているが、(32)の「形容詞+くする」の語彙概念構造においても、状態の「[y BE AT z]」と使役の「CONTROL」との間に、変化の「BECOME」が介在しており、両者には平行性が見られることが分かる。

## 6.4 「形容詞+める」と「形容詞+くする」の使用分布

### 6.4.1 「を」格名詞句の分布

6.3.2 節では、「形容詞+める」は変化の過程に焦点が置かれる表現であり、「形容詞+くする」は変化の結果に焦点が置かれる表現であると述べた。本節では、「形容詞+める」と「形容詞+くする」がどのような「を」格名詞句を取るかという名詞句の分布を調べ、そこに「形容詞+める」と「形容詞+くする」の意味的特徴がどのように反映しているかを分析する。この分析は 6.3.2 節で述べた「形容詞+める」と「形容詞+くする」の意味的特徴の検証にもなると考えられる。以下、「高める」と「高くする」をはじめ、「形容詞+める」と「形容詞+くする」について、それぞれがどのような名詞句を取るかを表で示す。各表の A には「形容詞+める」が取る名詞句を、B には「形容詞+くする」が取る名詞句を、C には両者が取る名詞句をあげてある。

#### (33) 「高める」と「高くする」

～を 高める	～を 高くする
A. <抽象名詞句> 民族意識・防犯意識 創造性・感受性・信頼性・正当性 安全性・耐震性・理解力・精神力 能力・成長力・集中力・行政力 結束力・開発力・想像力・生産力 心肺機能・心身機能・意欲・教養 資質・価値・基礎知識・関心・興味	B. <具象名詞句> 壁・塀・防音壁・煙突・鼻 地盤・鉄塔・天井・護岸 垣根・屋根・堤防・フェンス <抽象名詞句> 値段・単価・株価・保険料 授業料・給与・報酬・金利 敷居 温度・糖度・濃度・密度 数値・電圧・空気圧
C. 完成度・視聴率	



A:「高める」が取る名詞句

B:「高くする」が取る名詞句

C:「高める」と「高くする」両者が取る名詞句

(34) 「強める」と「強くする」

～を 強める	～を 強くする
A. <具象名詞句> 火・電波 <抽象名詞句> 体力・効力・抵抗力・決定力 影響力・支配・警戒・アジア色 傾向・体制・批判・働き・志向 提携・抵抗	B. <具象名詞句> 体・足腰・土手・粘膜・火 電波・繊維・骨・肝臓・家 毛細血管 <抽象名詞句> 日本・日本の銀行・政治体制 日本のサッカー・経済・会社 自分・チーム・基礎
C. 冷房・結びつき・つながり・きずな・連携・結束・団結・印象・基盤 関係・機能	

(35) 「深める」と「深くする」

～を 深める	～を 深くする
A. <抽象名詞句> 知識・交流・親交・理解・議論・親睦 友好・連携・関心・認識・協議・内容 対話・興味・考察・結び付き・思い 危機感・協調・検討・調査・研究 コミュニケーション・懸念・縁 信頼・考え・きずな	B. <具象名詞句> 水深・井戸・溝・奥行き・川底 傷 <抽象名詞句> かわり・傷(傷口)・森・苦悩 反目・危機
C. 関係・味わい・悲しみ・亀裂・溝(抽象名詞句)	

(36) 「かためる」と「かたくする」

～を かためる	～を かたくする
<p>A. &lt;具象名詞句&gt; 豆腐・ゼリー・髪・黄身</p> <p>&lt;抽象名詞句&gt; 足場・地位・枠組み・足元 方向性・証拠・基盤・具体案・支持 路線・見方・基礎・意向・容疑 守備(守り)・方針・票・人事</p>	<p>B. &lt;具象名詞句&gt; 地面・布・卵膜・便・地盤 表面・素材・鉄・骨・細胞壁 土砂・血管・鶏ふん・木材</p> <p>&lt;抽象名詞句&gt; 財布のひも・(友好)関係・きずな 結びつき・印象・姿勢</p>
C. 結束・決意	

(37) 「狭める」と「狭くする」

～を 狭める	～を 狭くする
<p>A. &lt;具象名詞句&gt; 面積・道幅・視野・視界・生息地 血管</p> <p>&lt;抽象名詞句&gt; 選択の幅・多元性・住民参加の場 行動の幅・門戸・(報道の)自由 可能性・経済格差</p>	<p>B. &lt;具象名詞句&gt; 部屋・道・歩道・車幅・室内 面積・球場・視野・幅</p>
C. 範囲・選択肢	

(38) 「薄める」と「薄くする」

～を 薄める	～を 薄くする
<p>A. &lt;抽象名詞句&gt; 派閥色・自民党色・ブランドイメージ</p>	<p>B. &lt;具象名詞句&gt; 酸素・牛革・鋼材・毛・壁・和紙</p>

抵抗感・影響・疑・存在感・期待感 不公平感・単独主義・意向	布団・モバイル機器・膜・しみ 教科書・アルコール・色・つゆ 生地・鉄板・ガラス・ディスク ＜抽象名詞句＞ 影・利潤・印象・関心
C. つゆ・効果・濃度・色・印象	

(39) 「緩める」と「緩くする」

～を 緩める	～を 緩くする
A. <具象名詞句> 手網・ねじ  <抽象名詞句> 気・手元・負担・手網・緊張(感) 警備態勢・警戒・規制・基準 設置認可・枠・(攻めの)手・監視 年齢制限・監視の目・財政支出 管理・気持ち・速度・指導	B. <具象名詞句> カーブ・こう配・傾斜・段差 水流・直角部分  <抽象名詞句> 校則
C. 条件・基準	

以上、「形容詞＋める」と「形容詞＋くする」がそれぞれ取る「を」格名詞句を表に示したが、これらの名詞句の分布をみると、次のような特徴が観察される。

- (40) 「形容詞＋める」は変化の結果状態を想定しにくい名詞句を取るが、  
「形容詞＋くする」は変化の結果状態を想定しやすい名詞句を取る。

以下、(40)の特徴に関して変化の結果状態を想定しにくい名詞句と想定しやすい名詞句とは具体的にどのような性質を持つものなのかについて検討していく。各表にも示してあるように、(40)の特徴と関連すると考えられる点として、抽象名詞句であるか具象名詞句

であるかという点がある。「形容詞+める」が取る名詞句には、次の(41)にあげるように程度・行為・概念などを指す抽象名詞句が多く、「形容詞+くする」が取る名詞句には、次の(42)にあげるように「壁・天井・体・地面・部屋・和紙」など実物を指す具象名詞句が多いという傾向が観察される。

- (41) a. 教養・価値・理解力・能力・集中力・機能・民族意識・創造性を高める。  
b. 体力・傾向・警戒・基盤・団結・きずな・つながりを強める。  
c. 交流・親交・友好・理解・議論・親睦・研究・考察を深める。  
d. 足場・決意・方向性・証拠・基盤・路線・守備を固める。  
e. 気・気持ち・警戒・規制・基準・制限・緊張を緩める。  
f. 範囲・選択の幅・門戸・可能性・経済格差・多元性を狭める。  
g. 派閥色・ブランドイメージ・不公平感・影響・意向を薄める。

- (42) a. 壁・塀・鼻・鉄塔・天井・護岸・垣根・フェンス・堤防を高くする。  
b. 体・足腰・土手・骨・肝臓を強くする。  
c. 水深・井戸・溝・奥行き・川底・傷を深くする。  
d. 地面・地盤・表面・鶏ふん・木材を固くする。  
e. カーブ・こう配・傾斜・段差を緩くする。  
f. 部屋・道・面積・幅・室内を狭くする。  
g. 壁・和紙・布団・教科書・モバイル機器・膜・鉄板・生地を薄くする。  
しみ・つゆを薄くする。

(41)の抽象名詞句の中には「能力」「集中力」などの「～力」や「創造性」「多元性」「可能性」などの「～性」のように程度性を持つ名詞句が含まれる。これらの程度性を持つ名詞句は変化の最終到達点を想定することが難しい。また、(41)には「教養・価値・研究・議論・警戒」など概念を表す名詞句が多いが、これらも変化の最終到達点を想定しにくい特徴を持つ。つまり、(41)の名詞句は変化の結果状態を想定しにくいという特徴を持つのである。例えば、「教養」や「価値」は「高い」という結果状態がどのような状態であるかということ想定することは難しい。このような事情は、(41)の名詞句は「?教養が高い」「?議論が深い」などのように、形容詞によって叙述されるのが不自然になる場合が多

いことから分かる。そして、このような名詞句の特徴が、「形容詞+める」と呼応する原因になっていると考えられる。

一方、(42)の具象名詞句は、抽象名詞句に比べて変化の結果状態を想定しやすい特徴を持っている。例えば、「壁」や「堤防」などは何らかの働きかけをしてある設定された「高い」という結果状態に変化させることが可能である。このような具象名詞句が持つ特徴は、変化の結果に焦点が置かれる「形容詞+くする」の意味的特徴に相応している。

ただし、先の名詞句の分布の表にも示したように「形容詞+くする」は具象名詞句ばかりを取るのではなく、次にあげるように抽象名詞句も取ることがある。

- (43) a. 値段・授業料・温度・電圧を高くする。
- b. 日本・日本のサッカー・経済・産業・会社を強くする。
- c. 財布のひも・結びつき・友好関係を固くする。
- d. 校則・基準・条件を緩くする。
- e. 傷(抽象的)・苦悩を深くする。
- f. 利潤・印象・影を薄くする。

(43a)の「高くする」は「値段・授業料・温度」などの抽象名詞句を取る。ただし、これらの名詞句は具体的な数値で結果状態を示すことが可能であるため、抽象名詞句とはいえ結果状態に関する情報には具体性が認められる。つまり、「高い」という結果状態を想定することが可能なのである。また、(43b)の「強くする」は「日本・日本のサッカー・会社」などの抽象名詞句を取るが、これらは具体的な形を持った実物を指す名詞句ではないが、これらを一つの個体として捉えるならば、これらの名詞句にも具体性が認められることになる。したがって、(43a)、(43b)にあげた名詞句は比較的结果状態を想定することが容易なものであると考えられる。また、(43c)～(43f)の名詞句にも具体性が認められる。(43c)～(43f)の「固くする」「緩くする」「深くする」「薄くする」はメタファー的に用いられていると考えられるが、これはすなわち、抽象名詞句が対象になっているとはいえ、結果状態は具象名詞句に生じる変化の結果状態に例えられていることになるので、そこに具体性は認められるのである。

以上、「形容詞+める」は程度性を持つ抽象的な名詞句を取ることが多く、「形容詞+くする」は具象名詞句を取ることが多いことを述べた。しかし、各表の C にもあげたよ

うに「形容詞+める」と「形容詞+くする」の両形式が取る「を」格名詞句の部類がある。次の(44)に名詞句 C をあげる。これらの名詞句は両形式の意味的特徴を満たす側面を持っていることになるが、この問題に関しては現段階では明らかな見解を示すことはできない。ただし、これらの名詞句には抽象名詞句が圧倒的に多いことから、メタファー的な用法との絡み合いが関係している可能性は高い。例えば、(44d)～(44g)の「深くする」「固くする」「狭くする」「緩くする」はメタファー的に用いられていると考えられる。この点を含め、今後考察を深めていきたい。

- (44) a. 完成度・視聴率を高める/高くする。  
 b. 冷房・結びつき・結束・関係を強める/強くする。  
 c. つゆ・色・効果・印象を薄める/薄くする。  
 d. 関係・亀裂・溝(抽象)を深める/深くする。  
 e. 結束・決意を固める/固くする。  
 f. 範囲・選択肢を狭める/狭くする。  
 g. 条件・基準を緩める/緩くする。

次にあげる「あたためる」は他の「形容詞+める」とは異なり、具象名詞句を取ることが多いという特徴を持つ。

(45) 「あたためる」と「あたたかくする」

～を あたためる	～を あたたかくする
A. <具象名詞句> 卵・ひな <抽象名詞句> 旧交・構想・懐 席(ベンチ)・椅子	B. <抽象名詞句> 人の気分・世界の中
C. <具象名詞句> 体・足・部屋・床・大気・空気・酒・料理・ごはん・鉄板 <抽象名詞句>	

(45)のCから分かるように、「あたためる」は「あたたかくする」と共に「体・足・部屋・空気」など具象名詞句を取ることが多い。抽象名詞句も取るが、それは「旧交をあたためる」「構想をあたためる」などメタファー的な用法であると判断される。ここで注目したい点は、「旧交をあたためる」や「卵・ひなをあたためる」などのメタファー的な用法に「あたたかくする」ではなく、「あたためる」が選択されている事実や、英語の「bench warmer: いつまでもベンチで待機している競技の予備員」からきた「ベンチをあたためる」に「あたためる」が用いられている事実である。このような事実は「形容詞+める」が変化の過程に焦点が置かれる表現であることを示唆している。なぜなら、「旧交をあたためる」「卵・ひなをあたためる」「ベンチをあたためる」などの事態は、いずれも変化の過程が重要な事柄であるため、変化の結果に焦点が置かれる「あたたかくする」ではなく、変化の過程に焦点が置かれる「あたためる」が選択されていると考えられるからである。

#### 6.4.2 位置変化を表す「形容詞+める」

(46) 「広める」と「広くする」

～を 広める	～を 広くする
<p>A. &lt;具象名詞句&gt;</p> <p>地酒</p> <p>&lt;抽象名詞句&gt;</p> <p>医学・感染症対策・客層・愛護の心</p> <p>キリスト教・平和のメッセージ</p> <p>基礎知識・理論・文化・技術・名</p> <p>菜食主義・習慣・知識・情報</p> <p>活動の場・理解・見聞</p>	<p>B. &lt;具象名詞句&gt;</p> <p>室内空間・展示室・面積・間隔</p> <p>出口・土俵・用水路・歩道・家</p> <p>避難路・車窓の窓</p> <p>&lt;抽象名詞句&gt;</p> <p>視野・客層・人の心・選択肢</p> <p>公開対象</p>
C. 範囲・視野	

「広める」は他の「形容詞+める」とは異なる意味的特徴を持つ。それは、「を」格名詞句の状態変化を表すのではなく、「を」格名詞句の位置変化を表すということである。例えば、次の(47)にあげるように「広める」と共起する「全国に」「日本に」「世界に」などの「に」格名詞句は位置変化の着点を指している。「広める」はこのように位置変化動詞の性質を持つため、「を」格名詞句の状態変化を表す「広くする」とは対立をなさなくなっている。

- (47) a. 地酒を全国に広める。  
b. 医学を日本に広める。  
c. 平和のメッセージを世界に広める。

## 6.5 「形容詞+める」と「形容詞+まらせる」

6.3 節では「形容詞+める」と「形容詞+くする」は異なる意味的特徴を持つことを述べ、6.4 節では「形容詞+める」と「形容詞+くする」は、両者が持つ意味的特徴に基づいて、異なる性質の「を」格名詞句を取ることを検討した。本節では、「形容詞+める」と「形容詞+まらせる」の選択原理について考察を行う。

「形容詞+める」と「形容詞+まらせる」は自動詞文「形容詞+まる」と自他と使役の関係にある。

- (48) a. 部屋を暖める。  
b. ??部屋を暖まらせる。  
(49) a. 冷房を強める。  
b. ??冷房を強まらせる。  
(50) a. \*子供を暖める。  
b. 子供を暖まらせる。  
(51) a. 不満を高める。  
b. 不満を高まらせる。  
(52) a. 議場を静める。  
b. 議場を静まらせる。



(48)、(49)では他動詞文が選択されているが、(50)では使役文が選択されている。この違いは他動性と使役性の違いに帰結する問題である。つまり、「部屋」や「冷房」は無生物であるため、暖まったり、強まったりする変化の実現が主語のコントロール下にある。したがって、他動詞文がそのような状況を表すのにふさわしい形式となる。一方、(50)では「子供」が有生物であるため、暖まるという変化の実現を直接引き起こすのは子供自身である。したがって、他動詞文は不適格になり、使役文が選択されている。ところが、(51)、(52)では「不満」や「議場」が無生物であるにもかかわらず、使役文も選択されているが、これは「不満」や「議場」の背後に関連する人間を読み込んでいるためである。このように、「形容詞+める」と「形容詞+ませる」の対立は、「～くする」と「～くさせる」の対立や「～ようにする」と「～ようにさせる」の対立と平行していることが分かる。

## 6.6 おわりに

本章では、状態述語文の他動化・使役化の方法として、形容詞から派生した動詞「形容詞+まる」「形容詞+める」を提示し、他動化と使役化における自他と使役の関係について考察した。そして、「形容詞+まる」と「形容詞+める」の自他と使役の関係が、第3章、第4章、第5章で考察を行った「～くする」「～くさせる」構文や「～ようにする」「～ようにさせる」構文における自他と使役の関係に対応されることを指摘し、状態述語文の他動化と使役化における「なる」「する」「させる」の自他と使役の関係を検証した。さらに、「形容詞+める」と「形容詞+くする」の意味的違いを明らかにし、両形式が取る名詞句の性質について説明を試みた。つまり、「形容詞+める」は変化の過程に焦点が置かれる表現であり、変化の結果状態を想定しにくい名詞句が「を」格名詞句としてくる。一方、「形容詞+くする」は変化の結果に焦点が置かれる表現であり、変化の結果状態を想定しやすい名詞句が「を」格名詞句としてくることを論じた。最後に「形容詞+める」と「形容詞+ませる」の対立を他動性と使役性の違いに基づいて説明した。